

2013 年度新入生による「学生相談室アンケート」の結果に関する 教育臨床心理学的考察

*Psycho-Educational and Psycho-clinical Examinations of New Students' Replies
to the Questionnaire Conducted by Center for Student Counseling (2013)*

北岡 智子 *Tomoko Kitaoka*

(非常勤学生相談室員)

佐藤 勝利 *Katsutoshi Sato*

(学生相談室長・兼任学生相談室員・人間発達学部)

木村美奈子 *Minako Kimura*

(兼任学生相談室員・デザイン学部教養部会)

菅嶋 康浩 *Yasuhiro Sugajima*

(学生部長・デザイン学部教養部会)

粟津 幹子 *Mikiko Awazu*

(非常勤学生相談室員)

伊藤 由夏 *Yuka Ito*

(非常勤学生相談室員)

山内恵理子 *Eriko Yamauchi*

(非常勤学生相談室員)

「大学全入時代」の大きな波の中で、また、2005年に施行された発達障害者支援法や国の特別支援教育への積極的取り組みの影響に伴い、多様な学生が大学に入学するようになった。

鳥山(2006)は現在の学生の心理的特徴として、見た目は立派でも中身は半熟であると指摘している。「温泉卵症候群」(鳥山, 2006)と言われるような、主体性が十分に育っておらず、内面が脆く葛藤を抱えられない学生が見られるようになり、昨今の学生の抱えている問題は多層的になっている。

小学・中学・高校へのスクールカウンセラー導入により、学生相談室は以前より身近な存在になってきていると思われる。しかし、新入生にとっては、なお敷居の高い未知な領域でもある。自ら援助を求めてくる学生に対応することは、学生相談室の役割の中で最も中心におかれているが、潜在的に困難を抱きながらも他者に援助を求めることができない学生に対しても過不足なく支援の手を差し伸べることが学生相談の重要な任務であるという指摘もある(山岸, 2012)。

入学期での学生相談室の役割は、支援を必要としている学生を早期に見出すことである(大倉, 2012)。本学生相談室でも、多様化する学生のニーズに応え、より効果的な“支援”

ないし“より積極的な働きかけ”を学生に行うための企画の1つとして、新入生にアンケートによる実態調査を行ってきた。『どのような“これまでの生活”を送ってきており、どのような“本学への志望から入学まで”を経験してきており、どのような“本学での生活”を希望しており、どのような“現在の心境”をもっているか』についての実態調査である。そして、その結果を「教育臨床心理学」ないし「教育現場における心理臨床」の視点から、検討しその概要を報告してきた（後藤他, 2007、佐藤他, 2008、2009、2011、橋本他, 2010、北岡他, 2012）。

今年度も引き続き、ほぼ同じ質問項目による調査を行ったので、ここに報告する。

調査の概要

- (1) 調査方法：質問紙調査。質問紙「相談室アンケート」は北岡他（2012）参照。
- (2) 調査日時：2013年4月6日実施の学生相談室ガイダンスの際に実施した。
- (3) 調査対象：2013年度入学生全員（522名）

結果と考察

1. 調査回収率

調査への回答率（回収率）を表1に示した。大学全体では92.5%の回収率であった。過去6年間の回収率は、学部、学科間で若干のばらつきはあるが、大学全体では85～98%にあり、本年度も例年通り良好な回収率を示している。

2. これまでの生活について

「高校時代の生活」を振り返っての満足度を表2に示した。全体ではほぼ83%の新入生が、「満足であった」「どちらかといえば満足であった」と回答しており、「どちらかといえば不満であった」「不満であった」とするものは、各学部とも、11%を下回っている。この傾向は、調査開始以来一貫しており、本学入学者の「高校時代の生活」に対する満足度の高さを示している。また、2010年度の調査結果と同様に各学部間のばらつきが見られ、＜美術学部＞の新入生の高校時代の満足度は他学部に比べ最も低く、78.8%に留まっている。各学部内の数値に目を向ければ、＜美術学部＞の【絵画】の入学者のそれは76.4%と他学部・コースに比べ低くなっている。また＜デザイン学部＞の入学者には「どちらかといえば不満であった」「不満であった」とするものが11.2%含まれている。新入生の学生相談室の利用率が＜音楽学部＞＜人間発達学部＞より＜美術学部＞＜デザイン学部＞が例年高くなることから、相談室としては注意をしていく必要がある。

一方、「受験生活」を振り返っての満足度については、「満足であった」もしくは「どちらかといえば満足であった」と回答した者は58.0%であり、2012年度とほぼ同様の結果となった（12年度は58.3%）。ただし2007～2010年度では60～69%の者が「満足であっ

表1 回答者および回答率

	音楽学部			美術学部			デザイン学部	人間発達学部	名芸大全体
	演奏	音楽文化創造	計	絵画	アートクリエイター	計			
入学者数	53	48	101	53	37	90	188	143	522
回答者数 (%)	52 (98.1)	45 (93.8)	97 (96.2)	51 (96.2)	34 (91.9)	85 (94.4)	179 (95.2)	122 (85.3)	483 (92.5)

表2 1. これまでの生活について

1-1 高校時代の生活を振り返って全体として

(数字は%)

	音楽学部			美術学部			デザイン学部	人間発達学部	名芸大全体
	演奏	音楽文化創造	計	絵画	アートクリエイター	計			
満足であった	78.8	55.6	68.0	52.9	52.9	52.9	46.4	54.1	53.8
どちらかといえば満足であった	19.2	26.7	22.7	23.5	29.4	25.9	34.6	31.1	29.8
どちらともいえない	0.0	13.3	6.2	13.7	11.8	12.9	7.8	11.5	9.3
どちらかといえば不満であった	1.9	0.0	1.0	3.9	2.9	3.5	5.6	3.3	3.7
不満であった	0.0	4.4	2.1	3.9	2.9	3.5	5.6	0.0	3.1
無回答	0.0	0.0	0.0	2.0	0.0	1.2	0.0	0.0	0.2

1-2 受験生活（高校時代および浪人）を振り返って

(数字は%)

	音楽学部			美術学部			デザイン学部	人間発達学部	名芸大全体
	演奏	音楽文化創造	計	絵画	アートクリエイター	計			
満足であった	36.5	26.7	32.0	25.5	20.6	23.5	27.4	23.8	26.7
どちらかといえば満足であった	32.7	31.1	32.0	41.2	38.2	40.0	27.9	29.5	31.3
どちらともいえない	21.2	35.6	27.8	21.6	20.6	21.2	34.1	36.1	31.1
どちらかといえば不満であった	7.7	2.2	5.2	7.8	11.8	9.4	6.1	8.2	7.0
不満であった	0.0	2.2	1.0	2.0	8.8	4.7	4.5	2.5	3.3
無回答	1.9	2.2	2.1	2.0	0.0	1.2	0.0	0.0	0.6

た」もしくは「どちらかといえば満足であった」と回答しており、「受験生活」の満足度はここ 1, 2 年やや低下してきている。また、細部を見ると、<美術学部>の【アートクリエイター】の新入生では「高校時代の生活」の満足度は高いにもかかわらず (82.3%)、「受験生活」に対しては「どちらかといえば不満であった」「不満であった」と回答している者が 20.6%と 20%を超えている。

後藤他 (2007) が指摘した「満足度が高い高校時代を送ってきてはいるものの、必ずしも受験生活に満足してこなかった」傾向がわずかではあるが増えているのかも知れない。

これらの結果が、本学への入学者がストレスフルな受験時代を送っていたり、不本意な入学をしていることを物語るのか、あるいは一般的な (健康的な)「受験」に対する否定的反応の表れに過ぎないのかを即断することは出来ない。相談室としては 10%以上の 1 年生が『受験生活に「不満であった」「どちらかといえば不満であった』と回答しており、その存在に注目する必要があるように思われる。学生相談室が教職員と連携しながら不満や葛藤の強い学生に対して、積極的な支援を進める時期と考えられる。

3. 本学への志望から入学まで

「本学への受験を決定した時期」、「学部・学科の選択理由」ならびに「本学入学後の気分」について尋ねた結果を表 3 に示した。

(1) 本学への受験を決定した時期

「本学への受験を決定した時期」としては、例年と同様で「願書を出す頃」を含めた高校時代とする者が圧倒的に多い (全体 98.8%)。「本学への受験を決定した時期」に、学部間の差異が大きい点も例年と同様である。<音楽学部><美術学部><デザイン学部>では、26%以上の者が「中学時代 (それ以前)」および「高校 1・2 年」時に、本学への受験を決定しているが、<人間発達学部>では 19%に過ぎず、80%近くが「高校 3 年生」「願書を出す頃」に本学への受験を決めていることも例年に見られる傾向である。これらの結果は、芸術学部と幼児・教育系学部の特質の差を端的に反映したものと考えられる。また【絵画】コースでは「浪人時代」に本学へ受験を決定した割合が他の学部、コースより高い (15.7%) ことから、本来希望した大学には入学できず、浪人中に本学を選択した可能性があると考えられる。【絵画】コースの新入生の中には少なからず、夢破れた者たちがいるとも推測される。

(2) 学部・学科の選択理由

「学部・学科の選択理由」(複数選択 = 3 項目以内) は、大学全体としては、「就職・将来を考えて」が第 1 位 (54.5%、例年は 50%程度)、次いで「本学の特徴が自分の性格にあっているから」が第 2 位 (39.3%、例年 40%程度)、以下は「合格の可能性を考えて」(25.9%、例年 25%程度)、「他大学を受験したが入試の結果で」(21.1%、例年 15%程度)、「通学距離、家庭の事情で」(17.0%、例年 20%程度) という順で選択され、過去 6 年間、選択順位・

表3 2. 本学への志望から入学まで

2-1 本学への受験を決定したのは

(数字は%)

	音楽学部			美術学部			デザイン学部	人間発達学部	名芸大全体
	演奏	音楽文化創造	計	絵画	アートクリエイター	計			
中学時代(それ以前)	11.5	0.0	6.2	0.0	2.9	1.2	1.7	1.6	2.5
高校1・2年	42.3	44.4	43.3	23.5	29.4	25.9	25.1	18.0	27.1
高校3年	34.6	44.4	39.2	52.9	64.7	57.6	65.9	71.3	60.5
浪人時代	1.9	0.0	1.0	15.7	2.9	10.6	3.9	0.8	3.7
願書を出す頃	5.8	6.7	6.2	3.9	0.0	2.4	3.4	8.2	5.0
一旦就職してから	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0
他大学に在学中	0.0	2.2	1.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.2
その他・無回答	3.8	2.2	3.1	3.9	0.0	2.4	0.0	0.0	1.0

2-2 本学の今の学部(学科)を選んだ理由は(3つ以内)

(数字は%)

	音楽学部			美術学部			デザイン学部	人間発達学部	名芸大全体
	演奏	音楽文化創造	計	絵画	アートクリエイター	計			
社会的評価が高いから	0.0	6.7	3.1	0.0	0.0	0.0	5.0	6.6	4.1
指導を受けたい教員がいるので	59.6	8.9	36.1	7.8	11.8	9.4	3.4	0.0	10.1
就職・将来を考えて	42.3	64.4	52.6	31.4	38.2	34.1	53.1	72.1	54.5
本学(学部)の特徴が自分の性格に合っているから	17.3	44.4	29.9	56.9	55.9	56.5	46.9	23.8	39.3
合格の可能性を考えて	15.4	13.3	14.4	23.5	29.4	25.9	24.0	37.7	25.9
他大学を受験したが入試の結果で	15.4	6.7	11.3	27.5	2.9	17.6	24.0	27.0	21.1
通学距離・家庭の事情で	7.7	2.2	5.2	23.5	14.7	20.0	22.3	16.4	17.0
本学に身近な出身者がいるから	21.2	24.4	22.7	13.7	17.6	15.3	7.3	9.0	12.2
何となく	0.0	2.2	1.0	3.9	2.9	3.5	7.3	2.5	4.1
その他・無回答	1.9	2.2	2.1	5.9	14.7	9.4	5.6	3.3	5.0

2-3 本学(学部)に入学して、あなたの気持は

(数字は%)

	音楽学部			美術学部			デザイン学部	人間発達学部	名芸大全体
	演奏	音楽文化創造	計	絵画	アートクリエイター	計			
満足である	44.2	51.1	47.4	25.5	38.2	30.6	32.4	37.7	36.4
どちらかといえば満足である	36.5	35.6	36.1	41.2	29.4	36.5	39.1	34.4	36.9
どちらともいえない	9.6	11.1	10.3	15.7	23.5	18.8	17.9	17.2	16.4
満足ではないが、このままで、頑張りたい	7.7	2.2	5.2	17.6	8.8	14.1	5.6	8.2	7.7
できれば転学部(転学科)したい	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.8	0.2
できれば他大学を再受験したい	1.9	0.0	1.0	0.0	0.0	0.0	5.0	0.8	2.3
その他・無回答	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.8	0.2

選択率ともに大きな変化は見られない。

学部、コースごとの詳細を検討すると、〈音楽学部〉では「指導を受けたい教員がいるので」(36.1%)、「就職・将来を考えて」(52.6%)が高く、特に【演奏】は「指導を受けたい教員がいる」(59.6%)が高く、「本学に身近な出身者がいるから」(21.2%)という理由で選択する学生がいる。【演奏】では本学への受験を決定する時期も「中学時代(それ以前)」を選択する者が 11.5%と他学部、他コースに比べて高い。これは、特定の教員の指導を求めて、早い段階から本学を志望する者が少なからず存在することを示している。

また、〈美術学部〉〈デザイン学部〉では「本学の特徴が自分の性格にあっているから」を高い割合(美術学部 56.5%、デザイン学部 46.9%)で選択しているが、〈人間発達学部〉ではその選択率は 23.8%に留まり、72.1%の者が「就職・将来を考えて」を挙げている。

これらは、本学入学者の学部・専門領域選択が各学部の専門性や特色と密接に結びついていることを如実に現しているといえる。

なお、全学的に観れば、「就職・将来を考えて」本学を入学してきた者は、本学全体で 54.5%を占めていた。これまでの報告では言及してこなかったが、この希望に大学がいかに対応していくかが今後の課題となるように思われる。文部科学省の「平成 25 年度学校基本調査」によると、大卒者の就職状況は大卒者 55 万 8853 人のうちで 37 万 5959 人が就職し、就職率は 67.3% (前年度比 3.4 ポイント上昇)であった。その中でおよそ 2 万 2000 人は非正規の労働者で、「安定的な雇用に就いていない者(非正規雇用+一時的な仕事に就いた者+進学も就職もしていない者)」の数をみると、約 11 万 5564 人(20.7%)となっている。このように、多くの大学生にとり昨今の就職活動は容易ではない。少子高齢化や不景気といった国内情勢の変化もあり、本学で習得した専門性(芸術、教育)を活かしきれずに就職活動を行う者は少なくない。「就職・将来を考えて」入学してきた学生に対して、学生相談室も教職員や就労支援を実施している組織や機関(ハローワーク、障害者職業センター、発達障害者支援センター、就労支援事業所など)と連携しながら、就労を支援する取り組みが必要になっていくものと思われる。

(3) 本学(学部)入学後の気分

「本学(学部)入学後の気分」については、表 3 の 2-3 に結果を示した。全体として 73%以上の者が「満足である」もしくは「どちらかといえば満足である」と答えており、例年までと同様、本学への入学を満足する者の割合は高い水準であるといえよう。学部間で差が見られるが【絵画】では「満足でないが、このまま頑張りたい」とする者が 17.6%占めており、〈デザイン学部〉では「できれば他大学を再受験したい」とする者が 5.0%とわずかながら存在する。【絵画】は「浪人時代」に本学を受験した割合が他学部より多く、夢破れた者が少なからずいると上述したが、その者の中には「満足ではないが、このまま頑張りたい」と気持ちに一区切りつけて、学生生活を過ごそうとする新生がいるとも推測される。「満足ではないが、このまま頑張りたい」ということは一見前向きな気持

表4 3. 本学での生活について

3-1 履修の方法や勉学の仕方について

(数字は%)

	音楽学部			美術学部			デザイン学部	人間発達学部	名芸大全体
	演奏	音楽文化創造	計	絵画	アートクリエイター	計			
よくわかる	3.8	2.2	3.1	0.0	0.0	0.0	2.2	1.6	1.9
だいたいわかる	30.8	44.4	37.1	41.2	11.8	29.4	31.8	7.4	26.3
少しわからないところがある	36.5	37.8	37.1	47.1	55.9	50.6	51.4	41.0	45.8
ほとんどわからず不安である	28.8	15.6	22.7	11.8	32.4	20.0	14.5	48.4	25.7
無回答	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	1.6	0.4

3-2 勉学に対する意欲は

(数字は%)

	音楽学部			美術学部			デザイン学部	人間発達学部	名芸大全体
	演奏	音楽文化創造	計	絵画	アートクリエイター	計			
充分ある	63.5	71.1	67.0	62.7	50.0	57.6	60.9	54.1	59.8
少しある	28.8	20.0	24.7	25.5	38.2	30.6	29.6	30.3	29.0
どちらともいえない	7.7	6.7	7.2	5.9	5.9	5.9	6.1	13.1	8.1
あんまりない	0.0	0.0	0.0	2.0	5.9	3.5	2.8	0.8	1.9
まったくない	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.8	0.2
無回答	0.0	0.2	1.0	3.9	0.0	2.4	0.6	0.8	1.0

3-3 (学内・学外を問わず) 現在、親しい友人が

(数字は%)

	音楽学部			美術学部			デザイン学部	人間発達学部	名芸大全体
	演奏	音楽文化創造	計	絵画	アートクリエイター	計			
同性にも異性にもいる	53.8	53.3	53.6	31.4	44.1	36.5	37.4	47.5	43.1
同性のみいる	42.3	37.8	40.2	54.9	38.2	48.2	54.2	45.9	48.2
異性のみいる	0.0	0.0	0.0	2.0	0.0	1.2	0.0	0.0	0.2
ほとんどいない	3.8	6.7	5.2	7.8	14.7	10.6	7.3	6.6	7.2
その他	0.0	2.2	1.0	2.0	0.0	1.2	1.1	0.0	0.8
無回答	0.0	0.0	0.0	2.0	2.9	2.4	0.0	0.0	0.4

表5 4. 現在の心境について

4-1 自分の性格・健康・家族・対人関係・学生生活・生き方などについて悩んだりすることが

(数字は%)

	音楽学部			美術学部			デザイン学部	人間発達学部	名芸大全体
	演奏	音楽文化創造	計	絵画	アートクリエイター	計			
大いにある	9.6	4.4	7.2	9.8	29.4	17.6	12.8	15.6	13.3
少しある	63.5	60.0	61.9	72.5	58.8	67.1	65.4	59.0	63.4
ない	26.9	35.6	30.9	13.7	11.8	12.9	21.2	24.6	22.6
無回答	0.0	0.0	0.0	3.9	0.0	2.4	0.6	0.8	0.8

4-2 困っている内容は(3つ以内)

(数字は%)

	音楽学部			美術学部			デザイン学部	人間発達学部	名芸大全体
	演奏	音楽文化創造	計	絵画	アートクリエイター	計			
学業	50.5	24.4	38.1	39.2	50.0	43.5	45.3	53.3	45.5
家族の関係	1.9	4.4	3.1	3.9	0.0	2.4	6.7	3.3	4.3
経済的問題	21.2	15.6	18.6	31.4	32.4	31.8	29.1	9.0	22.4
進路	30.8	24.4	27.8	41.2	38.2	40.0	38.5	15.6	30.8
友人関係	13.5	22.2	17.5	19.6	17.6	18.8	22.9	25.4	21.7
心身の状態	7.7	11.1	9.3	13.7	20.6	16.5	10.6	13.1	12.0
その他	1.9	2.2	2.1	5.9	8.8	7.1	7.3	5.7	5.8
困っていない	11.5	20.0	15.5	5.9	5.9	5.9	12.8	13.9	12.4

4-3 それらについて相談できる人が身近に

(数字は%)

	音楽学部			美術学部			デザイン学部	人間発達学部	名芸大全体
	演奏	音楽文化創造	計	絵画	アートクリエイター	計			
いる	94.2	95.6	94.8	90.2	76.5	84.7	87.3	91.0	89.2
いない	3.8	4.4	4.1	7.8	23.5	14.1	12.3	8.2	9.9
無回答	1.9	0.0	1.0	2.0	0.0	1.2	0.6	0.8	0.8

4-4 悩みや課題について、学生相談室を利用したいと思いますか

(数字は%)

	音楽学部			美術学部			デザイン学部	人間発達学部	名芸大全体
	演奏	音楽文化創造	計	絵画	アートクリエイター	計			
すぐにでも相談に行きたい	1.9	0.0	1.0	3.9	2.9	3.5	1.1	0.8	1.4
近いうちに相談に行きたい	1.9	0.0	1.0	5.9	8.8	7.1	6.1	4.1	4.8
いつか相談に行きたい	13.5	15.6	14.4	21.6	26.5	23.5	28.5	25.4	24.0
必要を感じたら行きたい	71.2	62.2	67.0	43.1	41.2	42.4	49.7	55.7	53.4
いまのところは必要を感じない	11.5	22.2	16.5	23.5	17.6	21.2	14.0	13.9	15.7
その他	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.6	0.0	0.2
無回答	0.0	0.0	0.0	2.0	2.9	2.4	0.0	0.0	0.4

ちの表れのようにも見えるが、気持ちの上で葛藤的になり揺れやすいとも考えられる。学生相談では、「頑張ろうとしたけれども、やはり違っていた」といった学生の言葉を、大学生活に少し慣れ始めた頃や学年が変わる時期などに聞くことがある。このことから、「満足ではないが、このまま頑張りたい」とする者の動向を注目したいと思う。

4. 本学での生活について

本学での生活にかかわる「履修の仕方や勉強の仕方について」の理解度や不安、「勉強に対する意欲」「親しい友人」の有無について尋ねた結果を表4に示した。

(1) 履修の仕方や勉強の仕方について

まず、「履修の仕方や勉強の仕方について」は、「よく分かる」「だいたい分かる」とする者は28.2%であり、70%以上の者が「少し分からないところがある」「ほとんど分からず不安である」としている。入学後にオリエンテーションの機会を作り履修について丁寧な説明が行われる中で、これらの不安は順次解消すると思われる。高校に比べて自由に自分で履修を組み立てることができることに戸惑いを覚える新入生はおり、新入生に対する一層のきめ細やかな就学上のガイダンスが望まれる。

(2) 勉学に対する意欲

次に、「勉学に対する意欲」では、88%を超える者が「充分にある」「少しある」と回答しており、「あまりない」「まったくない」とする者は2.1%となっている。これは例年同様の傾向を示しており、新入生は高い意欲をもって入学してきているといえる。

(3) 親しい友人の有無

また「親しい友人」の有無については、何らかの形でもっているとする者（「同性にも異性にもいる」「同性のみいる」「異性のみいる」とする者）が、今年度もどの学部も85%前後を占めていた。

一方で学部、コースごとの詳細を検討すると【アートクリエイター】は、他学部、コースと比べると10%を超える割合で「（親しい友人は）ほとんどいない」（14.7%）と答えている。友人が少ないことそのものが直ちに問題であるとは思わないが、これはある意味では、例えば大学生活に上手く適応することが難しいといった問題を孕んでいると考えられる。

5. 現在の心境について

「自分の性格・健康・対人関係・学生生活・生き方などについて悩んだりすること」の有無、「困っている内容」（複数選択＝3項目以内）、それらを相談することのできる人の有無および学生相談室の利用の意向を尋ねた結果を表5に示した。

(1) 性格・健康・対人関係・学生生活・生き方などの悩み

「自分の性格・健康・対人関係・学生生活・生き方などについて悩んだりすること」が

あるとする者（「大いにある」および「少しある」の合計）は、76.7%を占めている。例年に比べると、やや減少が見られる（06年度 83.5%→07年度 26.3%→08年度 83.5%→09年度 78.7%→10年度 82.5%→12年度 67.5%）。一方で悩みが「ない」と回答する者は、全体で 22%を占め、各学部間のばらつきは見られるが、＜音楽学部＞では 30%を超える新生が「ない」と回答している。悩みが「ない」と答える者が昨年度より 30%を超えるようになってきている。悩みがないということは、一見すると非常に健康的で精神的に安定していると捉えられるかもしれない。しかし、青年期は子どもから大人への移行期であり、「自分はどのような人間か？」という問いにぶつかり、悩み葛藤を抱きやすい時期といわれている。むしろ、青年期は悩むことが自然であり、悩みがあるものとして捉えられてきたように思われる。実はこの「悩みがない」「悩めない」ことに注目する必要があるのではないだろうか。

近年の大学生の心理的特徴として「悩めない大学生」を指摘している文献は非常に多くなってきている。例えば、苦米地（2006）は、近年の大学生の心理的特徴として、葛藤を抱えたり、自分の感情と向き合うことができなくなってきていると指摘し、悩むというレベルを乗り越えて、すぐに「落ち込む」あるいは「身体化する」傾向が強くなっていると述べている。また、川上（2013）は、現在の大学生はエリクソンが提唱した青年期の課題「自我同一性の獲得」に向けて悩み苦しむという葛藤のある状態から、時代の変化に伴って逸脱、抑うつ感へ移行し、徐々に「悩めない」状態へと変化していると指摘している。同様に、福田（2007）は臨床体験から、今は学生たちの訴えが不明瞭で何を悩んでいるのか、本人自身も分からないケースがあるとしている。また、高石（2009）も 2000 年を過ぎたころから、従来のアイデンティティを模索する悩みやそれに付随する症状（対人恐怖、強迫、離人症など）が少なくなっており、学生相談室には新たな来談学生の典型像として「問題解決のハウツーや正解の提供を求める性急な学生」と、「漠然と不調を訴え、何が問題なのかを自覚できていない学生」の二極化が見られると述べている。

本調査の悩みが「ない」とする者が、近年の大学生の心理的特徴と必ずしも一致するとは言いきれない。ただ単に受験が終わり入学時期には悩みがなくなっていたのかもしれない。悩みが「ない」のは、悩む力が育っていないとイコールではないだろう。また、質問紙は、悩みが「大いにある」「少しある」「ない」の 3 選択肢で、悩みが「ある」と答えることに抵抗を感じたのかもしれないが、今後悩みが「ない」とする者を注意深く見ていく必要があると思われる。

(2) 困っている内容

また、「困っている内容」（複数選択 = 3 項目以内）については、大学全体としては、「学業」が第 1 位（45.5%）、次いで「進路」が第 2 位（30.8%）、以下は「経済的問題」（22.4%）、「友人関係」（21.7%）、という順で選択され、各学部・コース間で選択順位・選択率ともに若干の違いは見られるが、大きな差異はない。大学生活の中で学業と研究の比重は高い。

高い学習意欲を有している新入生でも、これまでの高校教育とは異なる大学での学業に不安を覚えることは、十分に考えられる。また「自分の進路はこれで本当に良かったのか」と悩むことも考えられる。

内田(2009)によると、国公立大学の休学・退学率は1979年の調査開始以降徐々に増加しており、その理由として、勉強意欲の喪失・減退、単位不足、進路変更など、大学教育に対して消極的な理由を示す群が最も多く、積極的な理由のある学生の2～3倍であるという。これを受けて宇留田(2006)は、高等教育への進学率の増加とともに、進学目的が不明瞭なまま入学してくる学生の存在や高校までの学習と大学における学習で求められることのギャップ(受け身の学習から能動的な学習へのスタイル変化)についていけず、学習意欲が減退してしまう学生の存在があることを述べている。実際、学生相談室にも学業に不安を覚え、意欲が減退し来談する学生がいる。

大学の入試形態は一般入試に加え、推薦入試やAO入試など多様化している。その中で、個別学力試験を受けることなく入学する学生がいる。また、大学までに不登校を体験している学生も入学しており、それまでの学習が十分でないため、正規の授業だけでは理解が追いつかない場合も見受けられる(福田,2007)。このように学業に不安がある学生に対して、個別の対応、少人数講義や補習授業で対応することで不安の軽減につながる可能性があると考えられる。宇留田(2006)は、「大学における学び方を学ぶ」ための支援が必要な時期にきていると指摘しているが、本学においても修学支援が必要と思われる。

(3) 悩みを相談できる人の有無と来談希望

次に、悩みを相談できる人の有無について尋ねたところ、「いる」とする者が89.2%、「いない」とするものが9.9%であった。【アートクリエイター】は、他学部、コースと比べ「いない」と回答する割合(23.5%)が高くなっている。【アートクリエイター】は、「親しい友人はほとんどない」と回答する割合も他学部、コースと比べると高くなっていることから、学生相談室としては、気楽に来談できる場となるようにアプローチしていきたいと考えている。なお、学生相談室の利用についての意向を尋ねたところ、「すぐにも相談に行きたい」「近いうちに相談に行きたい」とする者は6.2%であり、「必要を感じたら相談に行きたい」とする者が53.4%を占めていた。

本学生相談室では、入学時に相談室ガイダンスと本アンケート調査を実施し、その後、相談室からの“様子伺い”のお便りを希望する学生に対して、6月中旬に発送している。学生相談室の紹介と“必要があればいつでも来談をどうぞ”といった意味を込めた文書である。また、新入生向けのイベントも企画している。一人暮らしをはじめめる者へのアドバイス、新入生の疑問や困っていることに対して在学生在が答えるといった形のイベントを、5月の連休後に学生支援課、保健室、学生相談室、自治会を含めた共同企画で実施している(「新入生応援企画 welcome to 名芸」)。しかし、このような働きかけが学生の自発来談に結びつくことは、これまでには極めてまれであった。相談室というリソースを必要と

している学生に必要な情報や支援を届けるためには、相談室からの積極的な働きかけと教職員との連携が今後一層必要となるものと思われる。

結語

今年度の新入生アンケートの結果について報告した。基本的には従来の傾向と大きな差はなく、多くの新入生は高校生活を満足できる状態で過ごし、高い勉学意欲を持って本学に入学してきていた。また、ほとんどの学生が悩みを相談できる人を持っており、豊かな大学生活を送るに足るリソースを持っているように思われた。

入学時の不安としては、勉学に対する不安や将来や進路への不安があることも示された。しかし、「悩みはない」とする者が 30% を超えており、「悩みを悩むことができない」今日的な問題を抱える学生が底在することも推察された。

また、過半数の学生が就職や将来を考えて本学に入学しており、これらの学生のニーズに大学がどのように応えていくのかは今後の重要な課題である。学生相談室でも、今後学内外の教職員や諸機関等との連携を一層深め、これらの問題に取り組む必要があることが示唆された。

文献

- 福田真也 2007 現代の大学生気質とこころの病気 『大学教職員のための大学生のこころのケア・ガイドブック 精神科と学生相談からの 15 章』 金剛出版 11 - 15.
- 後藤倬男・橋本裕明・粟津幹子・加藤友希恵・橋本容子・北岡智子 2007 新入生による「学生相談室アンケート」の結果に関する教育臨床心理学的考察. 名古屋芸術大学研究紀要 28 97 - 105.
- 橋本容子・北岡智子・菅嶋康浩・佐藤勝利・後藤倬男・粟津幹子 2010 2009 年度新入生による「学生相談室アンケート」の結果に関する教育臨床心理学的考察. 名古屋芸術大学研究紀要 31 355 - 364.
- 文部科学省 2013 平成 25 年度学校基本調査
http://www.mext.go.jp/component/b_menu/houdou/_icsFiles/afieldfile/2013/08/07/1338338_01.pdf
(2013 年 8 月 7 日取得)
- 川上華代 2013 <研究ノート>現代学生の特徴と学生相談についての一考察 問題や症状が維持され、変わらない学生の姿から見えてくるもの. 和光大学現代人間学部紀要 6 141 - 153.
- 北岡智子・佐藤勝利・木村美奈子・菅嶋康浩・粟津幹子・伊藤由夏・山内恵理子 2013 2012 年度新入生による「学生相談室アンケート」の結果に関する教育臨床心理学的考察. 名古屋芸術大学研究紀要 34 127-188.
- 佐藤勝利・後藤倬男・粟津幹子・加藤友希恵・橋本容子・北岡智子 2008 2007 年度新入生による「学生相談室アンケート」の結果に関する教育臨床心理学的考察. 名古屋芸術大学研究紀要 29 165 - 174.
- 佐藤勝利・後藤倬男・粟津幹子・橋本容子・北岡智子 2009 2008 年度新入生による「学生相談室アンケート」の結果に関する教育臨床心理学的考察. 名古屋芸術大学研究紀要 30 131 - 140.

- 佐藤勝利・栗津幹子・林美由記・伊藤由夏・木村美奈子・北岡智子・菅嶋康浩・山内恵理子 2011 2010年度新入生による「学生相談室アンケート」の結果に関する教育臨床心理学的考察. 名古屋芸術大学研究紀要 32 169 - 178.
- 高石恭子 2009 現代学生のこころの育ちと高等教育に求められるこれからの学生支援. 京都大学高等教育研究 15 79 - 88.
- 苫米地憲昭 2006 大学生：学生相談から見た最近の事情. 臨床心理学 6 168 - 172.
- 鳥山平三 2006 キャンパスのカウンセリング-相談事例から見た現代の青年期心性と壮年期心性-. 風間書房 159 - 167.
- 宇留田麗 2006 修学支援. 臨床心理学 6 200 - 209.
- 内田千代子 2009 大学における休・退学、留年学生に対する調査 第29報 第30回全国大学メンタルヘルス研究会報告書 70 - 85.
- 山崖俊子 2012 学生相談の役割-私が大切にしてきたこと-. 学生相談研究 33 (1) 72 - 83.